

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 NGUYEN Hanh Thi Hong

論 文 題 目

ベトナム語の名詞修飾表現

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	町田 健
委員	名古屋大学教授	佐久間淳一
委員	名古屋大学准教授	宮地朝子

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、ベトナム語の名詞修飾節（関係節）を、形態、統語、意味など総合的な観点から分析することを目的としたものである。ベトナム語の関係節は被修飾名詞に後続し、関係節の先頭に関係詞がある場合とない場合がある。

序章では、ベトナム語の名詞句の形態的特徴として、「人」「もの」「ところ」などの「単位名詞」と呼ばれる形式以外の普通名詞は、必ず類別詞を先行させること、この構造は、名詞の外延の個別的限定、名詞の属性表示など、関係節の意味的機能に関わらず保持されることを指摘した。

第1章では、被修飾名詞が関係節中で主語として機能する場合が取り上げられる。名詞が動詞に先行するこの構造は通常の文と同様であるが、動詞や繫辞が後続するなど、構造的に「名詞＋関係節」（関係名詞句）であることが明らかな場合には、関係節を明示する関係詞(mà)は節頭に配置されない。また、名詞は義務的に類別詞を伴うため、関係節は、テンス・アスペクト・モダリティー形式、存在や所有を表示する形式 có、程度や頻度の副詞などを含む述語によって、名詞の外延としての集合を限定する。

第2章では、被修飾名詞が関係節中で主語以外の機能をもつ場合が考察される。主語以外の機能とは、直接・間接目的語、場所、随伴者などであるが、この場合、被修飾名詞と関係節の結びつきが容易に理解できない時には、関係詞の使用が文の適格性を高める。この原則が適用される事例としては、関係名詞句の前後に文の要素が配置されている場合、関係節以外にも名詞を修飾する語句がある場合、関係名詞句がさらに別の名詞を修飾する場合、関係名詞句の解釈が複数生じる可能性がある場合などがある。また、関係名詞句が談話中の焦点である、あるいは関係節中の主語が新たに導入されるなど、意味的な限定性が大きい場合にも、関係詞が使用される傾向が高まる。

第3章では、日本語文法で「内の関係」と「外の関係」として区別される関係節のいずれもがベトナム語にも存在することが指摘され、外の関係を表示する関係節が考察される。この種の関係節は、名詞の内容を具体化する機能や、名詞が表示する事物に関連する事態を表示する機能を持つが、ベトナム語の関係節も同様の機能を果たすことができる。関係詞の使用は随意的であるが、名詞と関係節の結合を明示する必要がある場合には関係詞が使用される。ベトナム語の場合、「Xが走る前」のような、相対性を表示する関係節は不適格であり、関係節に形式名詞を先行させる必要がある。第4章では、ベトナム語と日本語の関係節が比較される。日本語の関係節は固有名詞や人称代名詞を修飾することができるが、ベトナム語では許容されない。これは、ベトナム語では、被修飾語が関係節中で主語である場合、その一般的な属性が表示されることが普通であって、個別・具体的な事態が表示されないことによる。一方、ベトナム語の関係節中には、日本語では不適格だとされるモダリティー形式を使用することができるし、疑問詞を修飾して任意の対象を表示することができる。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

名詞修飾節（関係節）は、名詞が表示する事物の集合を限定する機能を持つ文であり、同様の機能を持つが単一の語である形容詞よりも、集合を限定する程度が高い。すべての言語に関係節は存在するが、ヨーロッパ諸語のように形態変化をする関係詞を持つ言語、日本語やトルコ語のように関係詞を持たない言語、形態変化をしない関係詞を持つインドネシア語や現代中国語のような言語に分類され、現代ベトナム語は最後の部類に属する。また、関係節と被修飾名詞の格関係には言語によって制約があり、関係節化が可能な格については階層性があることが知られている。

本論文は、ベトナム語の関係節の特性に関して、形態、統語、意味の側面からの総合的な分析を試みたものであり、この言語の記述文法の精緻化に大きく寄与するものである。本論文の主要な重要性は3つある。1つ目は、固有名詞以外の名詞に義務的に付加される類別詞が、名詞に対応する事物をその特性に応じて分類する意味的機能を果たすために、特に被修飾名詞が関係節中で主語の働きをする場合には、関係節が被修飾名詞の一般的特徴を表示する傾向が高いという事実を指摘していることである。この結果、類別詞と共起することのない固有名詞を関係節で修飾できないという性質が説明される。この事実は、言語における関係節化の制約に関して、被修飾名詞の格に関しての階層だけでなく、名詞の類別性という別の特性もあることを明らかにするものであり、関係節一般の性質について新たな言語学的視点を提供するという価値を有する。2つ目は、随意的に出現する関係詞 *mà* が使用される条件が、被修飾名詞と関係節の連携の理解が阻害されうるか否かという、意味的な特性であることを解明したことである。形態的・統語的特性の決定に、意味が理解される過程が関与することは、まだ十分には証明されていないが、本論文の指摘は、この関与性を証拠立てる有用な補強的事実を提供するものである。この関係詞 *mà* がフランス語の影響で登場したという指摘は、言語接触による言語変化を例証するものとして興味深い。3つ目は、ベトナム語には日本語と同様に、被修飾名詞と関係節の間に格関係が存在しない関係節（「外の関係」）があるが、上述のように固有名詞は関係節化できず、また「Xが走る前」のような関係性を示す関係節は、ベトナム語では不適格であるという事実を論じたことである。関係詞の使用と外の関係の関係節の存在には密接な関係があるが、この場合にも意味的な制約があることを例証する重要な証拠となっている。

ただし、使用される術語の定義が不明確である、各章において論述される項目の配列に論理性を欠く場合がある、文章の理解が容易ではない場合があるなど、本論文には修正すべき不備もある。しかし、本論文がベトナム語および言語学一般の研究に対してもたらす学術的価値は大きく、この不備が本論文の高い学術的価値を損なうものではない。よって審査員一同、本論文が博士（文学）の学位を付与するに相応しいものと判定した。

論文審査の結果の要旨